

手紙の著者パウロは、「もはや、ユダヤ人もギリシャ人も…ありません。皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。もし、キリストの者だとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です」(ガラテヤ 3:28)という事柄を宣べ伝えていました。このパウロの考えに、多くのユダヤ人達が反感を覚えます。ユダヤ人にとって、自分達こそが旧約聖書において神が救いを約束したアブラハムの子孫であるという選民意識があったからです。パウロは、そのようなユダヤ人に対する神の約束は「決して効力を失ったわけでは」ないが、それは、ユダヤ人だけが救いの対象として選ばれたことを言い表しているのではない旨を示唆しました。その事を理解してもらうために、パウロは先ず、旧約聖書の登場人物を例に挙げて、神の選びと救いが「人の意志や努力」に基づくものではなく、「自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるため」であったことを示します。そして何より、その選びは「神の憐れみによるもの」、あるいは、かたくなにされた者については、「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだった」(11:32)、即ち神の憐れみを知るためであったと説明するのです。

映画『ヤコブへの手紙』を思い出します。主な登場人物は、目の不自由な老牧師ヤコブとある罪で服役していた女性レイラです。ヤコブは、毎日届く相談の手紙に対して返事をすることに使命を感じていました。しかし、ある日を境に手紙が届かなくなり、生きがいを失ったかのように意気消沈してしまいます。そんな中でヤコブは、自分の元に送られてきた手紙は、実は、神が自分を生かすために送って下さっていたものだったのだという視点の転換を促されていきます。また、そんな彼の姿を見て心を開いたレイラは、自分の罪を初めて告白し、「わたしは許されますか」と尋ねました。ヤコブはたとえ「人間にはできなくとも、神にはできる」という聖書の言葉を贈ります。置かれた境遇は違えど、二人とも神の憐れみなしには生き得ない一人の人間であること、しかしそれ故にこそ、人は互いに思い合い、祈り合うことができる、そんな事柄を伝える映画でもあります。

どんな人間も、神の憐れみを受けている(示されている)存在であることをパウロは伝えています(11:25～)。そして、そのような「主キリスト・イエスによって示された神の愛から、(誰も)わたしたちを引き離すことはできない」(8:39)と語るのです。

(文責：望月達朗牧師)

